

MRと薬剤師の二つのキャリアを生かしたキャリア支援を通じて

アポプラスステーション株式会社 メディカルジョブセンター

水 八寿裕

私は私大薬学部を卒業後、国内製薬メーカーで10年間MRを経験しました。1995年入社当時、プロパーあらためMRという呼称がようやく浸透してき始めた頃ですが、まだまだ接待や懇談会の実施などもまだ業務の大きな比重であったという記憶があります。このMRという仕事は、この10年間でかなりダイナミックに変貌を遂げていると認識しています。その変化を肌で感じる事ができたことがとても良かったと思っています。

MRという仕事が出来て良かったことは大きく分けて二つあります。一つ目は医療の中での製薬企業という立ち位置で医療人の一翼を担うことが出来たと感じたこと。二つ目はMR時代に習得した臨床知識を活かして、大学病院の薬剤師と保険調剤薬局の薬剤師の業務がスムーズに遂行できたことです。

1. 製薬企業の立場から医療人としての自覚が出来たこと

MRは患者さんと直接接触することは薬事法上禁止されているので、できるだけ多くの医療提供者との接点を持たねばならないということ先輩や多くの医療関係者の皆様から徹底的に教わりました。ここで「処方決定者＝医師」という考えに固執し医師のみに処方促進を働きかけるという従来型のプロパー的なイメージはなく「医療はチームで行われる」という感覚を徹底的に身につけます。このチーム医療という感覚を理解できた時から、診断→治療→処方計画→フォローアップの流れを重視した活動を心掛けました。このように医師がカルテに記入する記載方法や看護記録の書き方などに興味を持ち自主的に学習しました。臨床現場の思考プロセスをおおまかに理解できたことと後にMRを辞めて薬剤師の業務と平行してがん専門クリニックを立ち上げた経緯から、がん治療のことを勉強したい医療に関わる有志が気軽に参加できる「がん治療座談会」という会を作りました。会のミッションはがん情報を一般の方へ伝える際に専門用語をできるだけ使わないための自主的な勉強会で、参加者が順番で講師を担当する形式をとっています。参加メンバーは医師・看護師・薬剤師・MR・メディカルライターなど出来るだけ多くの医療関連職種の方へ呼びかけています。この会を作る際に、米国テキサス州のMDアンダーソンがんセンターでチーム医療を実践されている上野直人医師にご助言を頂き、チーム医療の運営の基礎となるファシリテーションやチーム医療のリーダーの育成などを目標に頑張っております。

2. MR業務の習得が、ゼロからの薬剤師業務の開始に非常に役立ったこと

MRは診断・治療の決定のプロセスに大きく関与しているので、そのような疾患や病態の知識をあまり持っていない調剤の現場では非常に重宝されます。現在の薬剤師の仕事はまず「処方箋ありき」なので、いかに効率よく調剤をするかが主目的となってしまうっており、患者さんの病態の背景や生活を知るという大事な医療人としての行動を考える余裕がありません。この状況で薬剤師が医療人における位置付けを客観視できるように誘導する役割は医療の枠組みを俯瞰出来ているMR出身の薬剤師が適役であると確信いたしました。保険薬局・大学病院で薬剤師業務をゼロベースから経験し、わずかですが理解したことは保険薬剤師や病院薬剤師がチーム医療の中でその知識と技能がまだまだ発揮されていない現実です。裏返せばMRがチーム医療における治療方針の決定に重要な部分を担っているということであり、薬剤師という立場から単純にみると非常に辛い状況に見えます。この点は薬剤師が医師や看護師とのコミュニケーションについてもっと積極的に引き出し、担当のMRの臨床知識をもっと理解すれば、MRと薬剤師が協業し両者が処方設計に深く関与出来る方法は必ず見えてくると考えます。

MRも薬剤師も立場は違っても同じ医薬情報を扱う職種です。チーム医療における中核を担うべき人材であって欲しいと思いますので、その役割を全うできる人材の育成なども現在考えております。より専門性を求められる職能へ向かっていく方向も同じです。今後は持っている知識や技術が他者から「わかりやすい」こともキーワードになっていきます。そのなかで医療サイド(薬剤師)・企業サイド(MR)の両方を経験しているという貴重な自己の体験から、自分自身のキャリアをじっくり見つめなおす機会が出来ました。私と同じようなMR出身者の方や薬剤師の方のキャリア支援業務を通じて、両者の社会的地位や立場の向上に努めていきたいと思っております。

(MR経験 10年)